聖霊降臨後第２３主日（特定２８）　希望を持って耐えること（終末をどのように迎えるか）

２０２２．１１．１３．

以前話したことがあるのですが、教会の近所の人の車に乗せてもらっている時に出てきたことです。

話の展開で、ご自分が大腸がんであることを、たいして重い気持ちでもなく、話されたことに驚きました。宮崎に来てから半年余りの付き合いで、初めて聞いたのですが、ひょうひょうと語る姿に、何か達観しているようなものを感じました。それから６年、現在もお元気です。

私はその人に話を合せるように「最近では、がんと聞いても驚かなくなってきましたね。今の最先端のがん治療というのは、何もしないこと、と言われていますね。」と言うと「ああ、慶応病院の近藤誠というお医者さんが本を出していますね。」ということになったのです。

その人は映画が好きなので、私はその時、「黒澤明の『生きる』という古い映画では、胃がんが死刑宣告みたいなものだ、と言っていましたから、隔世の感がありますね。」と話を続けたことでした。

その人はクリスチャンではないのですが、大腸がんということを率直に受け止めながらも、そのことに動じない、強い生き方に、感動しました。そして、そのことが、実は今日の福音書の大切な教えと共通しているように私には思えました。

教会のこよみでは、１１月が一年の最後の月になっています。そして、人間の死とか、復活信仰について、わたしたちはこのところ学んできています。そして、自分の死ということも考えるのですが、親しい人が病気で弱ってきている時、私たちは終りの時というものを考えてしまうのです。

今日の福音書は、イエス様がエルサレムにのぼって、十字架にかけられる週の火曜日くらい、弟子たちとエルサレムの神殿に行かれた時のことです。ある人たちが、神殿の立派なことに感激していました。この神殿が栄える、ということは、そのまま、神様が栄光をあらわしておられる、とユダヤ人は考えていたのです。しかし、見えるものに一生懸命になれば、見えないことには、疎かになるものです。

イエス様は、神殿がどんなに立派でも、つぶれる時が来る、ということを言われました。このことは、歴史的には、イエス様が十字架にかかった後、４０年くらいして、紀元７０年にローマ軍がエルサレムを壊滅させたことを預言されているんだ、と言われています。

しかし、今日の福音書で問題になっている神殿の崩壊ということは、国が滅ぼされる紀元７０年のことではなく、この世の終わりが来る、ということなのかもしれません。

イエス様の予告に驚いた人々は「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」と質問するのですが、「これから、いろんな恐ろしいことが起こるが、世の終わりはすぐには来ない。」と、イエス様は、その時について明言を避けておられます。

今まで歴史を通して、世の終わりがいつなのか、具体的に日にちを予言した宗教が、人々をあおったことが何度もありました。しかし、それらの予言は外れて、単なる一時的に人々を熱心にさせるだけの、愚かな手段でしかなかったことがわかってきました。

私たちにその時がわからない、というのは、自分が窮地に追い込まれないように、神様が憐れみをかけてくださっているんだ、という聖書の理解があります。

イエス様が、世の終わりについて、それがいつかを明言されなかったのは、私たちが人から強いられて生きる信仰生活ではなく、自分で信じて、私たちが責任を持って神様の前に生きてゆくためではないでしょうか。

世の終わり、とか、あるいは、自分の死とか、そのようなことを意識すると、私たちは平常心ではいられません。しかし、それを乗り越えて、私たち一人一人を呼び出して、私たちを生きたものとしてくださった神様への信頼を持つことはできないでしょうか。自分の前にやってきそうな大きな危機に対して、神様への信頼で乗り越えた人たちは、大勢います。

アッシジのフランシスについて、こんなエピソードがあります。ある日、フランシスは、兄弟の修道士と一緒に庭で働いていました。兄弟が「もし、今晩、世の終わりが来ると知ったら、兄弟フランシス。あなたは何をしますか？」と尋ねました。フランシスは言いました。「庭での仕事を続けます。」

似たようなことを、宗教改革を行ったマルチン・ルターが言っています。「たとえ明日世界の終わりが来ようとも、今日わたしはリンゴの木を植えよう」

これらの人々は、世の中がどのように動こうと、自分の寿命がいつまでだろうと、自分の普段の生活を、たんたんと過ごすことが一番賢明な生き方である、と知っているのです。

今日の福音書の後半は、たくさんの迫害が襲ってくることをイエス様が予告されているところです。その最後に「忍耐によって、あなたがたは命をかち取りなさい。」と言われています。それは、生き延びなさい、というのではありません。

先週の福音書の中でイエス様は、モーセが神様から呼ばれた時には既に死んでいるアブラハムたちのことについて神様が語られたことを引用されました。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」そして「すべての人は、神によって生きている」とおっしゃいました。生きている時でも、殺される時でも、私たちの名前を呼び、つながりを持ってくださっている神様に、信頼をおきなさい。それが、「命をかち取る。」ということなのです。

わたしたちは、自分の病気や辛い生活など、周囲からのいろんな圧力に負けることなく、常に私たちの名を呼んでくださっている神様に信頼を置いて、たんたんと日常生活をおくれる者でありたいと思います。